

## 入職1年目から現場で活かせる！ こころが動く医療コミュニケーション読本

中島 俊(著)

帝京大学大学院公衆衛生学研究科/  
医療共通教育研究センター・教授

石川ひろの

### コミュニケーションの“型”を身につけ柔軟に 運用する

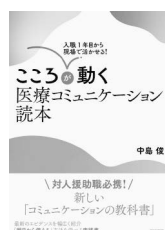
この20年ほどの間に、日本の医療者教育においても、コミュニケーションは医療者が身につけるべきコンピテンシー(能力)の一つとして広く認識されるようになってきた。客観的臨床能力試験(OSCE)の導入などと相まって、コミュニケーションは教育可能、評価可能な能力としてとらえられるようになってきたとともに、そこでは特にスキルの教育に焦点が当てられてきた。時に「マクドナルド化」と揶揄されながらも、学生だけでなく教育に携わる医療者の意識を大きく変え、全体としての医療者のコミュニケーション能力を底上げしてきたことは間違いないだろう。一方で、卒後のコミュニケーション教育は、それほど系統立って行われてはおらず、それぞれの現場に依存しているのが現状である。本書は、学部教育の先のコミュニケーションについて、何をどう学んだらよいかの手がかりになる一冊である。

本書は、臨床心理士でもある著者による「週刊医学界新聞」の連載「こころが動く医療コミュニケーション」に大幅な加筆、書き下ろしを加えてまとめられたものである。「入職1年目から現場で活かせる」ような場面やトピックを取り上げ、基本的かつ実践的なコミュニケーションのスキルがバランスよく紹介されている。患者さんとのコミュニケーションだけでなく、医療者同士のコミュニケーションも含め、コミュニケーション研究のエビデンスに基づくスキルや対処方法が具体例とともにわかりやすくまとめられているという

点で、まさに明日から使える実践書と言える。

それでいて、「こうすれば必ずうまくいく」という押しつけがましさがないのは、エビデンスに基づいた“型”を身につけることの重要性を知りつつ、その柔軟な運用こそが本質であるという著者自身の思いが根底にあるからだと思われる。結局のところ、コミュニケーションの学習や評価の難しさは、知識やスキルとそれを使うべき実際の状況が必ずしも一対一で決まっているわけではないことにある。コミュニケーションスキルは、目標を達成するために使われてこそ意味があり、一般的原則を理解した上で、特定の状況に適切に当てはめていくことが必要とされる。目の前の状況で自分の知っているどの“型”を使用するか、使用することで目的を達成できたのかを適切に判断し、自分のコミュニケーションを調節できるということにコミュニケーション能力の本質がある。

よいコミュニケーションは、患者さんを支援するだけでなく、医療者自身のストレス軽減、働きやすさにもつながる。そのための大きな力となる一冊である。連載を読まれていた方にもぜひ改めて手に取っていただきたい。



●A5/頁 152/2023 年  
定価：2,420 円  
(本体 2,200 円+税 10%)  
[ISBN978-4-260-05282-5]  
医学書院 刊